

朝鮮半島研究をどうするか<sup>(1)</sup>

木村 幹

(神戸大学)

## 問題設定

「地域研究」とは何であり、我々はどのようにしてこれに取り組むべきなのか。このような問題が議論されるようになってから、既に随分長い年月が流れている。このような議論の背景は幾つかある。一つは、各ディシプリンにおける研究方法や技術の洗練である。研究方法や技術の高度化は、必然的にこれらの習得に必要な年月を長期化させると共に、同様の研究方法や技術を十分に有しない人間が、各々のディシプリンに関わる議論を行う事を難しくさせた。当然の事ながら、このような状況は、例えば嘗ては多くの地域研究に存在した、「地域のあらゆる事象について説明、或いは分析する」タイプの地域研究者の存在可能性を著しく小さくさせ、引いては地域研究内部においても、個々の研究者が自らのディシプリンの中に閉じ籠りがちになる、という現象を齎した。結果、今日の地域研究者の多くは、「地域の」研究者としてよりも、自らが用いる「ディシプリンの」研究者としての自覚をより強く有するようになっていく。

今日の地域研究を巡る状況を困難なものにしているもう一つの状況は、グローバル化に伴う、研究対象である現地に関わる情報へのアクセスの容易化である。とりわけそこにおいて重要なのはインターネットの発達であろう。例えば、その事は新聞等のマスメディア経由の情報と考えればすぐにわかる。インターネット普及以前においては、他国の新聞や放送メディアが流す情報に接する事ができるのは、主として紙媒体で作られた情報に直接アクセスできる、極めて少数の人々だけであった。しかしながら、現在、多くの国における同様の情報は、インターネットを通じて容易に入手する事ができる。

加えて、グローバル化の進行の結果として、多くの国や地域において「情報の英語による発信」が増加している事も無視できない。即ち、自らの研究対象である国や地域からの情報発信が、現地語で為されている間は、少なくともその情報は、現地語を理解できる人間によって選択され、翻訳、或いは解釈される必要があり、地域研究者の役割の一つはまさにそこにこそあった、という事ができる。言い換えるなら、嘗ての地域研究者の重要な役割は、ディシプリンを越えた情報の「良き目利き」である事であり、この能力により、地域研究者は地域とディシプリンを連結する役割を果たしていた。

しかしながら、現地からの情報——現地の生の情報と研究により加工された情報——発信の多くが英語でなされるようになった今日、多くの研究者が、長時間の現地語習得の期間を経る事無く、直接、現地の情報を利用して自らに必要な研究・分析を行う事が相対的に容易になっている。

そして、このような今日の地域研究が持つ問題は、とりわけ現在或いは過去の発展途上国を対象とする研究においては、より顕著になっている。何故なら、研究方法や技術の洗練は、同時にそれらの画一化と普遍化を齎し、また、グローバル化と情報発信の現地語から英語への移行により、これらの研究手法が、より容易に世界各地に広まる事になっているからである。比喩的に言うなら、世界経済のみならず、世界の研究活動もまた、グローバル化により「フラット化」する事を運命付けられている、という訳である。

そして、当然の事ながらこのような状況は、現在或いは過去の発展途上国における研究水準の向上をも齎している。現地における研究水準の向上と平行して進む情報発信の英語化は、必然的に、現地の研究者の海外での活躍を活性化させる事と

なる。結果、それまで現地の一般社会やアカデミアと、自国の一般社会やアカデミアの間の仲介役を行っていた、地域研究者の役割は相対的に小さなものとなっている。

### 朝鮮半島研究という極端な事例

さて、このような地域研究を巡る問題は、我々が従事する韓国・朝鮮研究においてはどのように現れているのだろうか。

まず明らかな事は、依然としてグローバル化に背を向けた孤立を選択し、研究分野においても強いイデオロギー色を有している北朝鮮はさておいても、少なくとも韓国においては、現地の研究者達が上に述べた様な世界的トレンドに積極的に対応する方向で自らの研究を行っている事であろう。即ち、韓国の多くの研究者は、アメリカをはじめとした海外で博士号を獲得した、「グローバルスタンダード」に叶った研究手法を駆使する人々が多数を占めている。論文の執筆もまた、急速に韓国語から英語に移行しつつあり、嘗ては大きな力を有していた韓国国内の韓国語学術誌は急速にその権威を失おうとしている。

韓国においては、一般社会でもインターネットの普及が急速であり、政府やメディア関係をはじめとする様々な情報のデータベース化とオンライン化も大きく進む事になっている。英語による情報発信も盛んであり、依然として様々な制約があるとは言え、多くの政府関係文書や統計データは英語でも、直接アクセス可能になっている。

結果として、韓国研究を巡る今日の状況は、例えば20年程前と比べて大きく異なるものとなっている。嘗ては韓国国内の資料館や大学に直接赴き、苦勞して見つけ出して複写しなければならなかった資料の多くは、今や、遠く離れた他国からでも、オンラインで瞬時に入手可能なものとなっている。論文の執筆やシンポジウムの発表が、アカデミアの国際的標準言語となりつつある英語で求められる事も多くなり、英語の巧みでない研究者の立場はますます小さなものとなっている。

そしてこのような状況の変化は、日本における朝鮮半島研究においては、極端とも言える状況を

齎している。何故なら、この変化の結果として、嘗ては存在していた日本の朝鮮半島研究の優位性の幾つが、大きく損なわれてしまったからである。即ち、嘗ての日本の朝鮮半島研究は、1) その研究対象が地理的に近い所に存在し、資料等へのアクセスが容易であった事、2) 日本語と韓国語の間の言語的近接性故に現地語を駆使し得る研究者が多かった事、3) 植民地期の資料等を使う必要から多くの日本国外の朝鮮半島研究者が、日本語で書かれた研究成果を直接読む事が出来た事、4) 隣国であるが故に、多くの人が朝鮮半島に関心を持ち、それ故相対的に大きな市場が存在した事、等がそれである。

しかしながら、A) 現在では多くの基本資料がオンラインでアクセスできるようになった事、B) 研究言語が英語化し、流暢な現地語を駆使する他国の研究者も増加した事、C) 研究分野の細分化と日本の研究に対する評価の低下の結果として、日本語を解する朝鮮半島研究者が国際的に減少している事、により、先の1) から3) の優位性は大きく失われ、加えて、日本国内の朝鮮半島に関する相対的に大きな関心は、逆に朝鮮半島に関わる問題を政治化させる事により、研究者がこれを客観的に議論する事を難しくなる、という転倒した状況をも生み出す事になっている。

### ケースとしての朝鮮半島をどう利用するか

それでは我々はこのような状況で、どのように自らの研究を進めていけば良いのだろうか。何れにしても明らかな事は、従前の様な形で研究を続けても、日本の朝鮮半島研究はその地位を低下させるばかりである、という事である。取り分け重要なのは、韓国現地、及び、日本以外の韓国外の地域の研究水準が向上していることである。加えて、これらの成果にオンラインで容易にアクセスできるようになった今日においては、単に韓国の何かしらの事実を調査し、日本国内の市場に伝達する、だけでは、「研究」として十分ではない、という状況になっている。だからこそ、そこにおいて重要なのは、個々の研究者がもう一度自らの研究の意義を問い直し、朝鮮半島と言う「研究の

素材」をどのように生かして行くかを考えることになる<sup>(2)</sup>。

本特集は、このよう観点から、政治学、経済学、北朝鮮・国際関係、そして社会学分野の第一線研究者5人による4本の論文（1本は共著論文）を掲載している。各々のディシプリンの違い、そして何よりも各々の研究者の視点の違いにより、4本の論文では、それぞれ異なった朝鮮半島研究に対する新しいアプローチが模索されている。特集の責任者として、本特集が読者諸氏の研究の助けになる事を切に期待したい。

- (1) 本特集は、「朝鮮半島研究をどうするか：ディシプリンとの関係の中で」という共通テーマの下、神戸大学にて行われた現代韓国朝鮮学会第12回大会（2011年11月19日、20日）、[http://www.ackj.org/?page\\_id=159](http://www.ackj.org/?page_id=159)（最終確認2014年8月9日）、の成果を発展させたものである。この年の大会の開催校理事として、また、本特集の責任者として、ご協力いただいた方々に改めて感謝申し上げたい。
- (2) この点については、筆者は過去にいくつかの文章をものにした事がある。その最近のものとしては、「日本における韓国／朝鮮研究とその課題」徐興慶編『近代東アジアのアポリア』（国立臺灣大學出版中心、2014年）。また、『日韓歴史共同研究』をどうするか、『現代韓国朝鮮研究』第10号、2010年11月、「日本における朝鮮／韓国研究：『地域研究』と『外国研究』として」、拙著『近代韓国のナショナリズム』ナカニシヤ出版、2009年、等。